

## 大学院生の研究

## 博士後期課程3年次 大野 普希

パウサニアスの『ギリシア案内記』という作品を中心に、ローマ帝国支配下におけるギリシア人の歴史認識について研究をしています。この一年は、書きかけのまま、あるいは構想止まりで積み残しになっていた諸々の仕事を完成させることに努めてきました。論文を書き進める過程で、頭の中にわだかまっていた未解決の課題が、一部は解決し、一部はより浮き彫りになっていく一方で、新たな疑問や問いも生じてきて、充実した研究生生活を送っています。

昨年は久々にギリシアに行くこともできました。『ギリシア案内記』の記述に沿って、一面緑の生い茂るアルカディアののどかな風景の中を、野良犬に追い掛け回されたり、突然の夕立に見舞われたりしながら、毎日、日が沈むまで歩き回りました。『案内記』のたった一行の文章に、とんでもない移動距離が含まれていたり、あるいは数ページに渡って同じ遺跡が延々と描写されていたりと、部屋にもこもってギリシア語を読んでいるだけでは実感できない叙述の「濃度」の伸縮をじかに感じる事ができて、うれしい気持ちと同時に、普段の己の想像力の乏しさが恥ずかしくもありました。自分の足で稼いだ体験に照らして史料を読み、翻って史料を道標にして現実の空間を体験する、その間の往還を繰り返しながら研究を深めていきたいと思っています。

今年の目標は、校訂版に頼らずに、写本を読むようになることです。個々の箇所を解釈を突き詰めようとすると、その問題は、写本の読み方、校訂の仕方の問題に行きついてしまっ、自分の手に負える範囲ではないと引き下がってしまうことがこれまでは多かったのですが、今年こそは自分で写本を読むための技術を習得して、根本から史料解釈を行う力を身に付けたいと思っています。

## 博士後期課程3年次 岡本 幹生

これまでローマ史では、19世紀末のテオドル・モムゼンの研究以来、共和政がいかに崩壊し、帝政が誕生したのかに大きな関心が寄せられており、多くの研究者たちは、共和政から帝政へと移行した実態を解明しようとしてきました。それは、近年の研究が強調するように、アウグストゥスによって帝政や皇帝という制度が実際に創設されたわけではなかったからに他なりません。そこで、私はいかに帝政が成立したのかという実態に注目するのではなく、現政治体制のはじまりやその創始者とされるアウグストゥスの記憶の行方について注目して研究を進めています。

こうした関心をもとに、昨年度は、アウグスト

ゥスの跡を継いだティベリウスの時代(後 14-37)における現政治体制に対するエリート層の認識についての考察結果を論文としてまとめ、『史林』106巻6号(2023年11月)に「ウレレイウス『歴史』におけるアウグストゥスの歴史的位置づけ—尊厳毀損罪の裁判によるカエサルの記憶の再構成との関連から—」として掲載されました。もしよければ、ご一読くださいますと幸いです。

現在は、アウグストゥス自身が書き残し、彼の死後、自身の霊廟の前に設置させた『神君アウグストゥスの業績録』という碑文がアウグストゥスの記憶の形成に果たした役割に注目しています。この史料は、アウグストゥス自身が書き残したものであるということもあり、古くから注目され、帝政成立史やアウグストゥス研究においては重要視されているものですが、その多くはテキストにのみ注目し、分析を行ったものでした。そこで、この碑文が設置された場所やそこで行われた実践にまで視野を広げ、『神君アウグストゥスの業績録』がいかに後世に影響を与えたのかについて考察をしています。

## 博士後期課程3年次 神津 智史

私は、ドイツ騎士修道会による領内統治について、情報伝達回路とコミュニケーションの観点から研究を進めております。ドイツ騎士修道会の支配領域は、プロイセン地方、リヴォニア地方を中心に、中世ラテン・カトリック圏全域に広がる様々な所領群を含んでおりました。支配領域が広大なドイツ騎士修道会「国家」を運営していくには、その領内統治を貫徹するための広域情報伝達網が不可欠でありました。

ドイツ騎士修道会「国家」において、中央と地方とを結ぶ情報伝達回路として最重要であったものの一つは巡察制度でした。巡察とは、修道会の最高責任者である総長が、総会の同意のもと巡察使を任命・派遣し、派遣された巡察使一行が調査対象地にて、あらかじめ指示されていた調査事項を中心に現地調査を実施し、調査後にその結果を報告するというものであり、巡察の実施・報告をめぐって多くの文書が作成・送達されるのに加えて、口頭によっても多くの情報がやり取りされていきました。

15世紀に入って以降、書簡や報告書を中心にドイツ騎士修道会の巡察関連文書の伝来点数が増大していき、なかには巡察使が現地で実施した調査について詳細に記されているものも伝来しております。そのような史料の記述からは、巡察使が、調査事項について現地の人々との対面での口述調査を行うのみならず、それを自ら調査・確認することによって情報の確度を高めた後に調

査報告を行っていたということが明らかとなります。

今後は、このような情報伝達実践について、巡察使とは異なる類型の使節（特に、外国への派遣使節）の派遣・現地での活動・活動報告時に作成された文書群を考察の俎上に載せて、比較分析を行っていこうと考えております。

### 博士後期課程 3 年次 林 祐一郎

学者が題材を選ぶのではなく、学者が題材によって選ばれるのだと、何人かに言われたことがあります。研究生活は我々が送る *führen* ものではなく、何かに導かれる *geführt* ものなのかもしれません。近世プロイセン史を志していた筆者は知らぬ間に、近代ドイツ教会史・宣教史の考究へと誘われたのです。

筆者の第一研究は、第二帝政期におけるドイツ・ユグノー協会の成立と改革派諸教会結集運動を巡るものです。これに関しては昨年、査読論文が掲載されました（拙稿「前世紀転換期ドイツにおけるユグノーの末裔による歴史記述—歴史家アンリ・トランとドイツ・ユグノー協会—」『史林』第 106 編第 2 号、2023 年 6 月、76-111 頁）。在外研究中にも口頭報告を実施しています（Yuichiro Hayashi, „Erwachte Erinnerung?: Der Deutsche Hugenotten-Verein innerhalb der reformierten Sammlungsbewegung des Kaiserreichs“, beim Doktorand\*innen-Workshop im Rahmen des Forschungskolloquiums zur Geschichte der Frühen Neuzeit, am Friedrich-Meinecke-Institut der Freien Universität Berlin 04.07.2023）。ドイツではユグノー大会に現地参加しました（拙稿「痙攣する史的命—パイロイトにおける第五二回ドイツ・ユグノー大会の詳細な記述—」『千里山文學』第 3 号、2023 年 11 月、21-53 頁）。

第二研究は、ドイツ系伝道会の宣教活動と宗教研究を巡るものです。これに関しては本誌前号に覚書が掲載されています（拙稿「《動向・紹介》ドイツ系プロテスタント教会による日本伝道と関西—普及福音新教伝道会の宣教師エミール・シラーを中心に—」『フェネストラ—京大西洋史学報』第 7 号、2023 年 4 月、68-76 頁）。ベルリンとミュンヘンでも講演を実施しました（Yuichiro Hayashi, „Griff nach der Weltmission. Japanaufenthalt und Shinto-Forschung des Pfarrers Emil Schiller“, bei der Deutsch-Japanischen Gesellschaft Berlin e.V., am Japanisch-Deutschen Zentrum Berlin 27.11.2023; Yuichiro Hayashi, „Japanisches Religionsbewusstsein, beobachtet vom Missionar Emil Schiller. Erwartungen und Irritationen“, bei der Deutsch-Japanischen Gesellschaft Bayern e.V., an der Evangelischen Stadtkademie München 15.02.2024）。

これらと並行して、有志の大学院生たちと共に、歴史家ヨハン・グスタフ・ドロイゼン Johann Gustav Droysen (1808-1884) による史学論の読解にも努めております。この成果の一部は、今年度

中に公開されるでしょう。筆者は、過去の人々を動かした信仰的基礎への興味から転じて、我々が取り組む歴史学という営為に潜む原理の探究にも導かれつつあります。

### 博士後期課程 2 年次 新田 さな子

近世ヨーロッパの王政では、君主は成人男性が望ましいとされていましたが、世襲王政はたびたび非成人男性君主の即位に直面することになります。私は、1547 年に 9 歳でイングランド王に即位したエドワード 6 世（在位 1547-1553）に着目し、理想的ではない君主を戴いたとき、王国の統治はどのような影響や制限を受け、廷臣や有力者らはそれにどのように対応して統治を継続したのかを研究しています。エドワード 6 世の治世は、強権的な成人男性君主の治世が 2 代、約半世紀にわたって続いたあとに到来した、未成年男子君主の時代です。彼のあとは 17 世紀初頭まで女性君主が 2 代続いたため、半世紀を超える非成人男性君主時代の始まりでもありました。

これまでの私の研究では、王国の統治を、宮廷、地方都市、双方のコミュニケーションという 3 つの視点に分け、検討を進めてきました。まず宮廷にかんしては、エドワード 6 世が未成年男子であることが、有力廷臣がどのような肩書・仕方で政治を進めるのかを規定していた一方、どの有力廷臣が実権を握るかにエドワードは関与できず、臍頂の廷臣の失脚を止められないなど、未成年男子君主の権力や影響力には限界があることを明らかにしました。宮廷と地方都市とでは、宗派と政治の関係や、社会秩序、服従などに対する認識が異なっていたことも明らかにしました。

今年度は、地方都市によりフォーカスし、地方都市の有力者らは、未成年男子君主の権力をどのように理解していたのか、その理解は君主の成長と共に変化したのか、その理解や変化は地方都市の政治ならびに地方都市と宮廷のやりとりに影響を与えたのかを分析します。10 月からは渡英し、在外研究も行う予定です。

### 博士後期課程 1 年次 坂野 水咲

私は初期キリスト教における共食（愛餐・聖餐）と断食（四旬節）をめぐる教父の言葉について研究しています。修士論文では北アフリカの都市ヒッポ・レギウスの司教だったアウグスティヌスの説教『断食の効用について』や書簡などを用いて、アウグスティヌスにとっての断食の本質を明らかにし、また一般信徒たちが四旬節の断食・節制をとおして貧者への憐れみを養うように教父たちが促していた可能性を検討しました。今後はヨアンネス・クリュソストモスやアトリペのシェヌーテのような、同じく 4~5 世紀の教父たちの説教史料にも目を向け、説教を受容した側である人々の反応も探りながら初期キリスト教共同体における食事の歴史的な意義を明らかにしたい

と考えています。

また発掘調査にも関心があり、昨年の夏にはナバラ大学が主催するスペイン北部の遺跡 los Bañales の発掘プログラムに参加しました。考古学的調査の成果を適切に活用できるようになるため、今年も引き続き参加する予定です。

### 修士課程 2 年次 新垣 春佳

ウィーン大学に留学中の新垣です。現在は、両大戦間期のウィーンでの反ユダヤ主義を中心に研究に取り組んでいます。そのなかでとりわけ注目しているのは、第一次世界大戦後から 1930 年代にかけて活動していた「Antisemitenbund (反セム同盟)」という政治団体です。創設者のキリスト教社会党党员アントン・イェルツァベクは、後に NSDAP に転向した大ドイツ国民党员ロバート・ケルバーとともに団体を統率しました。ウィーン発祥の同団体は、1938 年の組織解体に至るまでに、オーストリア第一共和国全土に組織を拡大させていきます。反セム同盟は、市庁舎前で他の右派系団体と政治集会を開催し、自身の機関誌をもって苛烈な反ユダヤ主義論を展開しました。また、同団体は反ユダヤ主義を鏝に、党派閥の違いを超え政治家たちの集会所としても機能するなど、当時のウィーン政治空間において大きな存在感をもっていました。先行研究では、過激なアジテーション手法や思想から、ナチスとの関連性がたびたび指摘されています。しかしこれまで、同団体のウィーン市民社会における位置付けや影響力についての評価は十分にされてきませんでした。

本研究では、両大戦間期における、ウィーン都市空間での反ユダヤ主義的風潮の醸成に着目します。近代ウィーン史のなかで、1880 年代から政治の場で反ユダヤ主義のイデオロギーが台頭し、1938 年のナチスによるアンシュルスを機に、ユダヤ人への暴力が「公的に認められる」ようになりました。そしてほとんどの人々は抵抗することなく、新たな社会規範に適應していきました。約半世紀のなかで、反ユダヤ主義はいかにしてウィーンの人々の間に根付いていったのか。修士論文では、反セム同盟の市民社会での位置付けや影響力を切り口として、この問いについて考えていきたいと思ひます。

### 修士課程 2 年次 田中 のえ

私はローマ帝国の軍隊、特に、帝政期にローマ帝国の辺境地域に駐屯した軍に関心があります。帝政盛期におよそ 40 万人を抱えた軍隊は、元老院議員などのごく少数による官僚制と都市自治を原理とし、「小さな官僚制」と呼ばれた、帝政前期のローマ帝国の統治メカニズムにおいて、行政などの分野で重要な役割を担ったと考えられています。そこで私は、軍を手がかりにローマ帝国の支配の実態を明らかにしたいという思ひか

ら研究を進めています。卒業論文では、後 1 世紀のローマ帝国北西辺境に駐屯したローマ軍の家畜供給を手がかりに、ローマ軍の補給政策および辺境地域の実態を明らかにすることを目指しました。昨年度は、その卒業論文のテーマをさらに発展させる形で、軍への家畜供給の担い手となったと考えられる退役兵に焦点を当てて研究を進め、辺境世界が、駐屯軍と現地地域社会の需要と供給という実際上の必要性で結びついた世界であった可能性に迫りました。その研究の成果は『西洋古代史研究』第 23 号に論説「ローマ帝国北西辺境における軍の補給政策 一家畜の生産と供給の実態を分析して一」として掲載されています。また、昨年度の 9 月からは、平和中島財団の奨学生として、交換留学の枠組みでドイツのハイデルベルクに 1 年間滞在しています。怒涛の留学生活とはじめての論説の執筆が重なり、修士課程進学当初に思い描いていたようには研究が進んでいませんが、今だからこそできる貴重な体験も大いに学びになるのではと考えています。今後は、卒業論文から続けていたテーマが一段落したこともあり、帝政期の軍というテーマは維持しつつ、家畜供給から離れて研究を進める予定です。ローマ帝国の軍隊は、その多種多様な任務のために、社会、経済、文化など様々な側面において帝国を形作っています。そうした軍の面白さに焦点を当て、帝国支配の実態をより広い視野から紐解いていけたらと思っています。

### 修士課程 2 年次 藤本 俊哉

現在、私はローマ帝政期エジプトの任意団体の活動について研究しています。任意団体は古代経済の実態を解明する重要な存在です。古代経済がどのようなものであったか、という論争には長い歴史があります。19 世紀末に Bücher と Meyer の間で、古代経済は原始的か、近代的か、という論争が起きました。その後論争は続きましたが、Finley が 1973 年の *the Ancient Economy* で古代世界に経済システムを見出すべきではない、という主張を打ち出して以降、この考えが主流になりました。しかし、1980 年代後半の新制度学派の登場により、この考えは見直されつつあります。新制度派経済学では、様々な制度（成文法、慣習法、商売契約、家族形態、結婚の風習...）の生成・運用・発展過程に注目し、経済を分析します。古代経済の文脈では、任意団体がその制度の一つとして大きな注目を集めています。

また、エジプトは古代世界の中でも特色ある地域です。それは、当時の一般の人々の生活の様子が克明にわかる、ということです。砂漠に埋もれたことによって、パピルスは水分が吸収されてカラカラになり、長期間保存され、当時の様相を今に伝えています。エジプトの歴史にもその特徴を見ることができます。前 7 世紀ごろからギリシア人が王朝期のエジプトと交流をはじめ、プトレマイオス朝の支配によってエジプトもギリシア語

圏に入ることになります。しかし、エジプトではギリシア本土のようなポリスが建設されることはほとんどありませんでした。アレクサンドリアを含め、ローマ帝政期では4つのポリスが存在しただけで、王朝時代以来の村落社会が形成されていきました。その中で、任意団体は地域社会を結び付ける役割を果たしていたとされています。

修士論文では、紀元後1世紀のローマ帝政期のエジプトの任意団体の活動に注目します。任意団体を通じて、当時の人々が活発な経済活動を行っていたことを論じたいと考えています。

### 修士課程2年次 三谷 優輝

私は西ローマ帝国の滅亡が、ガリア・セナトール貴族にもたらした変化について勉強しています。西ローマ帝国は5世紀初頭から、度重なるゲルマン人諸部族の侵入を受けて帝国としての機能が失われつつあり、476年にゲルマン人傭兵隊長オドアケルが東の宮廷に帝位を返上した事で、形式的にも帝国が崩壊したという理解が一般的です。

しかし、ガリア・セナトール貴族たちが、東の皇帝に対して皇帝の推挙やゲルマン人勢力の拡大の訴えなど、西ローマ帝国を存続させるための活動を行っていることから、彼らがローマ帝国であることに誇りを持ち、最後まで希望を持って活動し続けていたことが読み取れます。そのような彼らにとって、476年は非常に大きな変化なのではないかと考えています。

そこで、5世紀半ばにガリアで活動したシドニウス・アポリナリスが残した書簡集を扱い、当時のガリア・セナトール貴族たちのアイデンティティがどのように変遷したのかを解明したいと考えています。彼はリヨン生まれのガリア・セナトール貴族であり、最後の抵抗戦であるクレルモン攻囲戦における精神的指導者でした。しかし、この戦いが帝国政府によるオーヴェルニュ割譲という形で決着がついてしばらくすると、彼は西ゴート支配下のクレルモン司教として活動を再開します。しかし、書簡集を見ると、高尚なラテン的教養とそれを持たない野蛮なゲルマンが、対比的に書かれる場面が多く、ゲルマン人支配下の地域で司教をするというのは、屈辱的な行為であっただろうことは想像に難くありません。先行研究では、ローマ文化の担い手としてキリスト教に乗り換えたと考えられています。私はこうした屈辱の中で、彼を含めたガリア・セナトール貴族が476年の変化をどのように受け入れ、なぜローマ文化の担い手をキリスト教に定めて聖職者になっていったのかについて論じたいと考えています。

### 修士課程1年次 熊谷 光里

私は近世から近代にかけてのフランスにおけるカトリック信仰の変容とその過程に関心があ

ります。フランス革命がアンシャン・レジームを打倒したことで教会は特権を失い、次第にカトリック信仰自体も批判されるようになりました。そして革命以前から啓蒙主義の広まりによって力を持ちつつあった理性崇拝がカトリックにとってかわり、一時は再興が図られたものの、革命を機に宗教実践は減少し、現在のライシテへとつながっていきます。

卒業論文では革命期の内戦であるヴァンデ戦争に焦点を当て、カトリック王党軍と呼ばれたヴァンデの民衆の生活、及びカトリシズムの形態を分析しました。その結果、ヴァンデの農民と領主の間には父子関係に近い結びつきがあったこと、農民は培った信頼関係と聖職者という立場への尊敬故に司祭を崇拝していたこと、生活の基盤及び精神の軸として、戦時におけるカトリシズムの発露が多くみられることが分かりました。

今後は、個人の信仰実践に留まらず教区共同体組織という観点から身分間の関係性やカトリックとの関わりを考察していきたいです。また、今回史料として用いた回想録の著者はヴァンデ軍の司令官の妻であり、革命前後に政治の世界で活動した女性たちの一人、かつ敬虔なカトリックかつ王党派という特性を持っていました。そのため、彼女とは別の立場にある新しい視点からの検討を重ねることで、貴族女性というフィルターを客観的に見直すことが出来ると考えています。加えて、革命後になされたカトリック再興の過程も分析したいです。革命期後半、厳しい反カトリック政策や非キリスト教化運動の反動としてカトリック再興の動きが起こり、ナポレオンが教皇と政教協約を結んだことでフランスは正式にカトリシズム回帰を果たします。政府の方針が変わりゆく中で、特にかつて非キリスト教化を推し進めた人々がどのように情勢を捉え、行動したのかを探っていききたいと思います。

### 修士課程1年次 肥後 尚恕

19世紀後半のフランスにおける香水の広告を分析し、有機化学や工業の発展によって香水の生産と消費の様相が変化し始めた同時代における香水と嗅覚を取り巻く概念、特に当時のファッションやマナー等における嗅覚の扱いなどの背景情報、街示的消費やジゼルメルの提起した流行などの古典的な消費行動モデルを援用しつつ、広告がどのようなメッセージやイメージ(付加価値)を商品に与え消費者に消費を促したかという点に関しての考察を行っている。

卒業論文では個々のポスター広告それぞれの描写内容を文字化し、特徴的な描写を列挙して個々の広告を分析可能な形に落とし込んだ上で幾つかのポスターに共通して登場する要素、例えば植物や女性の描写など、を挙げ、論じた。

当初の想定では感覚史や経済史、美術史など複数分野を横断する研究になるつもりだったが、広告を時間的、美術的に分類、体系化する

ことに失敗し、現状では個別の分析を並べることには終始している感が否めない。

今後の発展としては、個々の企業や消費者の経済的事情など広告の背景に関する資料を収集しより多元的、多角的な理解を行えるようにしつつ、それと並行して大きく香水業界を取り巻く環境が変化した20世紀も研究対象に組み込み時間に基づいた比較をできるようにすること、或いは、広告だけでなく百貨店やそれぞれの直営店において香水がどのように視覚的に演出されたのかというスペクタクルの研究の方向に議論を拡張することも可能かと考えている。

#### 修士課程1年次 松本 陸斗

私は、イギリスにおけるサッチャー政権と家族との関係に関心があります。イギリス初の女性首相マーガレット・サッチャーは、新自由主義を掲げ、あらゆる分野で改革を推し進める一方で、性別役割分業や核家族を特徴とする「伝統的な家族」、すなわち近代家族の維持をしきりに呼びかけました。しかし、彼女を前にして、これまでと同じものなど何もなく、近代家族も変容を迫られることとなります。近代家族を強調するサッチャー政権のもとで皮肉にもそれが変容していくというパラドキシカルな現象に興味を持ち、卒業論文ではサッチャー時代を「家族」という観点から

再検討しました。

卒業論文では具体的に、サッチャー時代における近代家族の変容を促す要因として、2つのことに注目しました。第一は、女性のライフコースの多様化です。1960年代以降、イギリスでは、婚外出産や中絶件数の増加、雇用労働への進出など、女性の生き方が次第に多様化し、近代家族は変容し始めることとなります。この流れにさおさして政界で出世したサッチャーでしたが、首相に就任した彼女はあくまでも「男性稼ぎ主-女性主婦」型の近代家族を是とし、それを強調しました。しかし、このサッチャー政権こそが、近代家族に変容を迫る第二の要因となったのです。特に、新自由主義的改革に伴う失業の危機やストライキは、家族の瓦解や家庭内での性別役割分業の動揺を引き起こし、コミュニティの連帯をも創出しました。以上を踏まえ、サッチャー時代は、近代家族とは異なる、新たな家族の「かたち」を生み出しつつあった時代だったといえるのではないかと私は考えました。

今後は、サッチャー政権による近代家族の強調を受け、それに抗おうとした人々（フェミニストなど）や、連帯によって弱肉強食の新自由主義時代を生き抜こうとした人々（NGOなど）に注目し、研究を進めていきたいと考えています。